

は臼蓋への集積を観察していたものであった。又、骨シンチ上 AVN の早期像とされる集積の欠損像は9件にみとめられた。このうち5件では骨 Xp 上、異常がみとめられず AVN の早期診断に SPECT が有効であると考えられた。

2) SPA 法, DPA 法による骨塩定量の検討

大滝 広雄・野口 栄吉 (新潟大学放射線科)
井浦 敏彦・杉柳 勇

(はじめに)

代謝性骨疾患の診断に用いる骨塩定量の方法として、単光子吸収法 (SPA 法) と2光子吸収法 (DPA 法) について検討したので報告する。

SPA 法は ^{125}I を線源に用い、約 30KeV の γ 線1本を放出し主に橈骨を測定する。

DPA 法は ^{153}Gd を線源に用います。これは1核種で2本の γ 線、44KeV と 100KeV を放出し主に腰椎を測定する。

(結論)

1) DPA 法による再現性は $\text{CV}=0.67\%$ と良好だった。

2) DPA 法による被曝線量は 1mR であった。

3) 腰椎では下位レベルで BMD 値は高くなる傾向を示した。

4) 腰椎での BMD 値は加齢と共に低下した。

5) 骨塩量は腰椎の値が橈骨に比して、より病態を反映していることが示唆された。

3) 下顎骨に発生した骨肉腫の1例

坪田 雅代・林 孝文 (新潟大学歯科)
中山 均・佐々木富貴子 (放射線科)
中村 太保・伊藤 寿介

今回、我々は軟骨様組織形成を主体とする下顎骨骨肉腫を経験した。

患者：19才。男性。下顎左前歯、左下口唇のしびれ、臼歯部歯肉の腫脹を主訴とし、既往歴、家族歴、共に特記事項なし。

この症例の CT, ECHO, MRI 所見を病理組織所見と比較して検討してみた結果、CT は病変のおおよその進展や骨組織の変化の描出はできたが、内部性状および周囲組織への invasion の正確な把握に限界があった。ECHO は病変の進展や骨組織の変化の描出に限界があるが、内部性状や皮膚表面に近い周囲組織との境界を把握する事ができた。MRI は、tumor の進展や周囲との

境界を非常に鮮明に示したが、病理組織との対応は今後尚検討を要すると考えられる。

今回我々は、CT, ECHO に加えて、初めて、顎顔面領域の画像診断に MRI を取り入れたが、病変の進展を把握する上での MRI の有効性が明らかとなった。

4) 鼻部異物の1例

林 孝文・坪田 雅代 (新潟大学歯科)
中山 均・佐々木富貴子 (放射線科)
中村 太保・伊藤 寿介

箸を口にくわえていて転倒し、箸が口蓋を貫き鼻腔に達して折れ、先端が迷入した1才4カ月の男児について CT による検索を行った。その結果、口蓋に円形骨欠損を認めるものの画像上、内部に箸を見いだし得無かったが、手術によりこの骨欠損に一致して箸が証明された。このような骨内の微小腔内部は周囲の高い X 線吸収値を示す骨の影響を受けて、計測された CT 値が常に内部性状を反映しているとは言い難い。そこで乾燥頭蓋骨に人工的な円形骨欠損を作り、箸を入れ、関心領域の面積を変えて CT 値計測を行った。その結果、関心領域が骨欠損の直径の約 1/2 を越えると急激に CT 値が上昇し、周囲の骨の影響が強くなるがそれ以内では内部性状を診断するのに十分な信頼性を持つものと判断された。症例のような骨欠損内部の異物の診断に CT 値の計測は条件を明確化することで有意義になるとと思われる。

5) 肺巨細胞癌の1例

関 裕史・秋田 真一 (新潟大学放射線科)
杉田 公・斎藤 真理
稲越 英機

61才男性の肺巨細胞癌の1例を報告した。右 S9a 末梢に辺縁不鮮明な結節影を認め、広汎な肺門縦隔リンパ節腫大を伴っていた。右肺癌 T₁N₃Mo stage 3B と診断され放射線治療を施行したが、右頭頂葉の脳転移・癌性腹膜炎を引き起こし死亡した。

肺巨細胞癌は比較的稀な腫瘍である。症状発現時には進行例が多く、臨床経過は比較的急速で早期に転移しやすく、治療に抵抗性であるため、肺癌の中でも予後不良の型の一つといわれている。今後、この腫瘍の特徴をよくつかみ、早期発見、早期治療に努めるべきだと考える。